

●おんな二代の記」●日本にまたれた不幸 林えいたい「嗚咽する海」●青春の澄みきった感性 杉山隆人「人間は秋に生まれた」●元帥の回顧 明石大

●「マッカーサーの二千年」●竹久夢二の世界 竹久夢二「勿忘草(わすれなぐさ)」●天日燦として焼くがごとし 吉野せい「漢をたらしめた神」●市川房枝・市川

●杉森久英「錆びたサーベル」●真実の追求 カール・バインスタイン「ポプ・ウッド」●大統領の陰謀 ●なぜ女は耐えねばならないのか 市川房枝・市川

●おんなの教育とは何か 遠藤豊吉「学習塾 ほんとうの教育とは何か」●ある恋歌 鈴木明「リリー・マルレーン」を聞いたことがある

●幻の絹の道 辺見じゅん「呪われたシルクロード」●推理小説のおもしろさ アガサ・クリステイ「カーテン」●ポアロ最後の事件」●魂をゆす

●「リッツ・その愛」●「リッツ・その死」●子育てとは何か 山住正己「中江知恵編注「子育ての書」」●女ひとり大地を行く 小山内美江子

●「東海自然歩道を行く」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「郷土」●「リッツ・その死」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

●「娯楽性の中にひそむ警告」●娯楽性の中にひそむ警告 田中光二「爆発の臨界」●生と死 自然と人間の対比 ●ヘミングウェイ「老人と海」●ナン

永畑道子

青春流転

著者紹介

ながはな みちこ
永畑道子

熊本市生まれ。熊本大学法文学部東洋史学科卒業。熊本日日新聞記者、福音館書店『母の友』編集を経て、現在、ノンフィクション作家として、教育・女性問題の分野でルポルタージュ、評論などを発表している。

主著・『たたかう中学生』（第三文明社）1976、『お母さんと女教師』（文化出版局）1977、『セピア色の本棚』（エボナ出版）1977、『私の親子論』（明治図書）1978、『ひらかれたPTA』（第三文明社）1978、『受験と非行の時代に』（国土社）1979、『野の女』（新評論）1980、『子どもの側に立つ』（明治図書）1981、『炎の女』（新評論）1981、『PTA歳時記』（新評論）1982、『恋の華・白蓮事件』（新評論）1982、『自立への序曲』（明治図書）1983、『青春流転』（新評論）1983。

共著・『これからの親子』（明治図書）1973、『わが家の教育』（第三文明社）1975、『内申書』（民衆社）1976、『受験に悩む親たちへ』（明治図書）1976、『みんなが主役のPTA』（草土文化）1977、『乳幼児期の子を持つ親へ』（ダイヤモンド社）1979、『育てる』おんながつづるおんなのくらし（筑摩書房）1979、図説『人物日本の女性史』（小学館）1980、『女・母と娘』（ユック舎）1981。など。

編著・『<非行>・学校・家族』（新評論）1983。

青春流転

（検印廃止）

1983年8月15日 初版第1刷発行

著 者 永畑道子

発行者 二瓶一郎

発行所 株式会社 新評論

〒160 東京都新宿区西早稲田3-16-28 電話 東京 (202)7391 番
振替 東京 6-113487 番

定価はカバーに表示してあります

印刷 新 栄 堂

落丁・乱丁はお取替えます

製本 鈴木製本

©永畑道子, 1983

Printed in Japan

0095-950009-3177

序

夢中で生きてきて、あるとき、ふいに、さびしくなるときがある。

たったひとりの自分に、気づくときがある。

子育ての修羅場のただ中にいても、そんな瞬間があった。ひとを愛していると思いながら、その愛が揺れつつける、くるしいときがあった。

そんなとき、私は本をよむことで、すくわれていったようだ。砂地に水が沁みこむように、こころは素直に、文字を受け入れた。

いのちの意味、仕事をする意味、一心不乱で生活していく意味。本をよむことは、そのことを確かめ直す作業でもあった。

よそゆきの顔をした本は、あまり好きではない。

真実を、ありのままにさらしたものが、ほしいと思う。

さびしがりやの私が、生きる勇気をあたえられている一冊の本がある。

『戦仕度の日々——ねむの木の子どもたちと』

この本を最初にひろげたのは、静岡経由で東京へ帰る鈍行の列車の中であった。東海道線菊川の駅から、車中に乗りこんだとき、窓の外はいちめんの夕焼けになっていた。

「ねむの木学園」の取材をすませたばかりで、宮城まり子さんから、この本をいただいていた。窓からさし込む火事場のような光のなかで、第一頁目、一行目の言葉が、私のなかにとびこんできた。

「もう出ていけませんもの」

白樺の木に包まれて、宮城さんが立っている。緑の下生えが、足元をやさしく埋めている。その写真とともに記されている詩。

……深い森の木立の中で

あなたに とっても甘えたくて

おいかけて 行こうとしたのだけれど

私は こらえたのです

深い森の木立の中に

迷いこんでしまいますと

もう 出ていけませんもの……

たったいま見てきた、宮城さんと子どもたちの、いのち触れあう場面を私は思い出して、この道は後戻りできぬ、ここからはもう出ていけぬ、"私は こらえたのです"という宮

城さんの、きびしい思いが伝わってきて、列車のなかの人前というのに、涙がふき出て、仕方なかった。

『戦仕度』そのままの、ねむの木の生活。

宮城さんの手は、荒れていた。重い脳性小児マヒ後遺症の、五十二人の子の、ひとりひとりの面倒をみ、おむつを洗い、抱きしめて眠る、おかあさんの手。

ぶっくりと骨太で、ヒビが切れていそうな、労働の手を、目の前にみつめていた。

この詩に、私は、宮城さんの、強烈な『おんな』を感じている。

感性するどい、りりしい女優でもある宮城さんは、ひとりの『女』としてのしあわせに甘えてはいられない。

『こらえ』て、生きていくほかない。

身を分けた子ではないのに、ほんとうの母親と思いこんでいる何人もの子がいて、その子が生きていく先は、宮城さんの肩に重くかかっている。

子どもたちの多くの家庭は崩壊していて、帰るべき家もなく、まして重い障害を背負い、宮城さんは、その子たちの上にユメをみる。やがて、子どもたちが、誰かを愛し、結婚して、ともに住むようになる、そのとき働いて生きていけるように、この子たちには生活の手立てを教えておきたい、ねむの木のみわりには、小さな家がいくつもいくつも欲しいと。宮城さんが、舞台に立つのは、そのため。国や社会が支えてくれない子を、小さな身体で支えている、そのための『戦仕度の日々』なのだ。

私はほんとうに、はずかしくなる。生きているのかと、自分にムチ打つ思いで、これか

らの日々に思いをはせる。

たのしい本もあってよい、ただ美しいだけの本もあってよい、泡のように消えていく本の洪水のなかで、魂にふれてくる本はほんのわずかであり、それだけに何と、とおといことか。

もくじ

序 Ⅰ

風立ちぬ、いざ生きめやも 10

詩と花とアフリカ 14

沈黙の春 18

かもめは何を考えたか 22

元始、女性は太陽であった 26

気球への夢 30

青春の記憶 34

「良妻賢母」のはじまり 38

日本に生まれた不幸 42

青春の澄みきった感性 46

一元帥の回顧 51

竹久夢二の世界 5

天日燦^{さん}として焼くがごとし 8

明石大佐の帰国 64

真実の追求 88

なぜ女は耐えねばならないのか 72

ほんとうの教育とは何か 76

ある恋歌 80

幻の絹の道 85

推理小説のおもしろさ 89

魂をゆすぶる愛の書 93

子育てとは何か 98

女ひとり大地を行く 102

娯楽性の中にひそむ警告 106

生と死、自然と人間の対比 110

ナンセンス文化のあとにくるもの 114

東方へ、蓬萊へ、不老長寿の天地へ 118

ほんとうの教育の場を求めて 122

心のノート 126

夕陽へ疾走した少女 130

青春をかいまみる 134

芙蓉の花の恋 139

私を狙う若者をもとめて 143

生と死の境に 147

放浪の子よ 151

『手織り布』の絵本 155

田中正造の抵抗 159

中年の美しいエリカ 163

ノンフィクション・ノベルの旗手たち 167

十代の犯罪 171

山頂の花束 175

獄中からの手紙	179
『果なき旅路』を生きる	183
青い海と少年	188
文学は、痩せおとろえた	194
水かげろうの旋律	198
十七歳の愁い	202
天から吹きおろす風のなかで	206
明治の女	213
都市のなかの孤独	217
夏草の野に死す	221
キャパのかなしみ	225
異聞・白蓮事件	229
ジゴロの唄	237
人間哀歌・一九八三年	245
結	249

青春流転

風立ちぬ、いざ生きめやも

人を愛することのつらさが、ようやく身に沁みはじめたのは、十七か十八のころだったろうか。すべてが、恋をおもう材料となった。

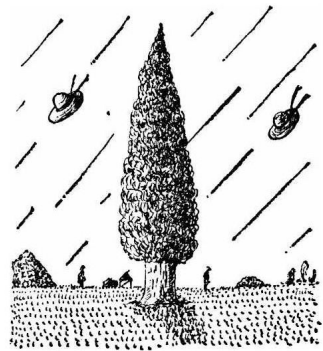
地平に陽炎が立つところになると、遠くの山をみたいとおもい、はるかな土地まで、あてもなく歩くことをねがったりした。

空をみあげながら、ひとの名を呼ぶこともしばしばだった。
そんなある日。

「——午後（それはもう秋近い日だった）私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべって、果物をかじってゐた。砂のやうな雲が空をさらさらと流れてゐた。そのとき不意に、何処からともなく風が立った。私達の頭上では、木の葉の間からちらっと覗いてゐる藍色が伸びたり縮んだりした。——

風立ちぬ、いざ生きめやも」

暗い図書室のなかで、この字句と出会ったときの気持ち、生なましく蘇ってくる。



胸にびしりとくい入る文字が、“ときめき”のようにいつまでも心に残った。生と死の道程が、心に沁みて、仕方なかった。白樺の木かげで、風に吹かれて確かめあった生が、ひとすじに死に至る道のかなしさ。

図書室にパンと水を持ちこみ、本をよみつづけ、ものを書きつづけて、一日を過ごす仲間たちの背に、同じかなしみが、ありありとにじむ時代だった。

昭和二十三年――。心もからだも、飢えていた。充たしてくれるのは、本だけだった。

予科練や陸幼あがりの級友たちは、いずれも死に損ないの若者たちばかりだった。鹿児島鹿屋で、出撃直前に敗戦を迎えたという特攻くずれも、何人かいた。

夜明け、まだもやに包まれた近くの畑に、大根や人参をぬきにいき、それをかじりながら夢中で本の世界をさまよう日々だった。

『出家とその弟子』、『善の研究』、三木清、出隆、小林多喜二の著作集と、食べるように漁りつづけるなかで、堀辰雄のこの本は、砂漠のなかの小さな泉に似ていた。

戦争がすんで三年は経つというのに、私たちは、何ひとつ信じることができなかったのだ。人間の愛、以外には……。

“自殺”が、旧制高校の学生寮にとっては、日常茶飯時に過ぎぬほど、心は生と死のさかいに留まりつづけていた。マントに包まれて運び出されていく屍を、私たちは平然と見送り、自分がいつ、その行為に身をまかせるかもしれぬという、かすかな覚悟さえ固めていた。

そのさ中に、この一文と出会ったことを、私はけっして、忘れることができない。

死に近づく節子を描きながら、生きることへの努力、ハヶ岳をとりまく雲、林、地上の村、すべて、生きるいのちへのあこがれを、これほど深いかなしみの中でうたった書を、私はそれまで、知らなかった。心に彫りつけるようにして、読みすすんだ記憶がある。

「太陽はすでに高く登ってゐた。山や森や林や畑、——さうしたすべてのものは秋の穏やかな日の中にも安定したやうに浮んでゐた。かなたの小さく見えるサナトリウムの建物の中でも、すべてのものは毎日の習慣を再び取り出してゐるにちがひなかった……」

——節子は、胸を病んでいた。知りあつたのは、夏。いちめんにすすきの生い茂った草原で、節子は熱心に絵を描いていた。

「私」はその傍に身をよこたえ、夕方になると、肩に手をかけ合つたまま、かなたの入日に染む雲を、地平線を、いっしょに見守つていたものだった。自然のなかで、同じように息づいたこの幸せは、束の間に過ぎ去ってしまう。

婚約した「私たち」は、ハヶ岳のサナトリウムとともに旅立ち、山あいを渡る風のなかの病室で、「生きる」ための努力をひっそりとはじめた。

死が、節子の身体を蝕むのは、日がおちてから——自然が眠りにつく夜半。日一日と衰えていく中で、死をみつめる故にいっそう、生きようとする意志が節子を支え、「私」をばげましつつけていく。

序章、春、風立ちぬ、冬、死のかげの谷、と、作品は五つの章にわかれている。

「序章」は、夏の野に立つかるやかないのちとの出会いを語り、「春」は、フランス窓の

ある部屋で人形のように病むフィアンセと、その父との愛を、まぶしく綴っている。

『風立ちぬ』の章では、ハヶ岳の山深くきて、そこが人生のはてであるかのような、小さなサナトリウムの暮しを、ふたりの愛の大切な起点としていくメイン・テーマ——「生きるためのたたかい」が、抑えた筆で、切々と語られていく。

『冬』の章には、雪雲にとざされたきびしい自然のなかで、病あつい節子との、やさしくあたたためあう愛が——そして終章『死のかげの谷』で、死をこえてなおわが身のなかに生きる恋人のいのち——すぎとおるほどに昇華された愛の結末を、私たちは知る。

堀辰雄は、一九二四年、矢野綾子と婚約、その翌年病のためにうしなうという、暗い体験をもった。この小説は、リルケの影響のつよいなかで書かれ、一九三六年冬、はじめて『改造』に発表されたもの。

生と死と愛という、若ものの胸に宿る永遠のテーマを、自然と人間のみごとな対比のなかで、一字一句克明に描き出している。

なんと甘美な、恋の書であることだろう。

詩と花とアフリカ

詩を忘れて久しい。花を忘れて久しい。詩がいつも心の中にあるような、そんな生き方をしたいと願った目があった。生きることに夢中で、心の生き様を忘れているとき、思いかけず詩と出会うことがある。乾き切った心に気づいて、そのたびに自分を恥じた。

家業のひまに、父も母も歌をよみ、詩を作った。逆境にあればあるほど、家の中に詩らしいものがあふれ、悲しみを蔽った。焼け跡のバラックで本を売る。裸木の壁によせて、いつも野の花が活けてあった。近くの河原で摘んできたシオン、野菊、すすきや菜の花。花だけは、絶えたことがなかった。そんな中に育てられた身が、詩を忘れ花を忘れて、からからの日を送っている。自らの荒廃はたえようもない。

ベトナムに、漸く形の上だけでも停戦が実現したころのある日。ハノイの街の花売り場のようすを、テレビが伝えていた。道路いっぱいを埋めつくした花、花。あの北爆の中で、どこでこれほど、たわわの花が育ったのか。髪に小花の冠をつけた娘たちの、はればれと

